

全国医師国民健康保険組合連合会第63回全体協議会 特別講演
 (令和7年10月11日 アオッサ 8F 県民ホール)

近代医学を拓いた若狭・越前の医人たち

認定NPO 法人杉田玄白・小浜プロジェクト理事長
 杉田玄白記念公立小浜病院名誉院長
 京都大学名誉教授

小西淳二

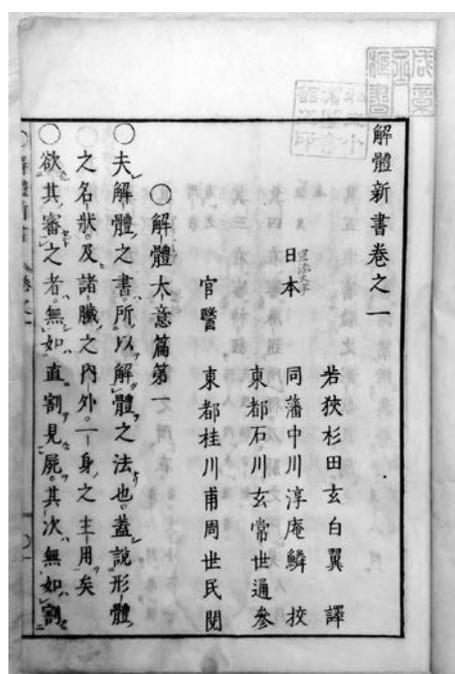
江戸時代の中期から後期に蘭学の導入・展開を図り、日本の近代医学に夜明けをもたらした若狭・越前の3人のパイオニアについてその業績をご紹介したい。

1765年奥医となった。以後も藩主の参勤交代に従い、少なくとも3回小浜に帰る。

- 1) 杉田玄白らによる『解体新書』の翻訳と出版
- 2) 小石元俊による漢蘭折衷医学の推進
- 3) 笠原白翁による種痘の導入

1) 杉田玄白らによる『解体新書』の翻訳と出版

杉田玄白（1733～1817）は江戸の小浜藩下屋敷（新宿区矢来町）にて藩医・杉田甫仙の三男として出生。諱を翼。字は子鳳、号を鷓齋、晩年には九幸翁の別号を用いた（鷓とは鷓鴣の鳥）。8歳から13歳まで小浜で過ごし、江戸に帰った後、幕府奥医師 西玄哲にオランダ流外科を学び、1753年 三代目の藩医となり、



「解体新書」関係者の年表



中川淳庵（1739～86）は小浜藩医・中川仙安の長男として江戸で出生。はじめ純安と名乗る。諱は鱗りんもしくは玄鱗。字は攀脚。幕府医官・田村藍水に師事して、薬品会に若狭の薬草を出品したり、同門の平賀源内による『物類品隲ひんしつ』の校訂者になるなど当代一流の本草家となった。1768年に三代目の藩医（内科）となり、1778年に奥医となった。1785年 酒井忠貫に従い初めて父祖の地小浜に帰る

『解体新書』を生んだ背景

- ・小浜藩主、初代酒井忠勝は譜代筆頭の大名、石高123,500石、老中、大老として33年間にわたり幕藩体制の核心にあった。
- ・若狭は日本海交易の拠点として繁栄していた。
- ・学問奨励の藩風：多くの優れた儒学者、藩医を集めた。

杉田家初代甫仙は1703年に、中川家初代仙安は1715年に藩医となった。

国学者・伴信友や、順造館（1774年開講）で学んだ梅田雲浜を生む。

- ・1754年 山脇東洋が行った我が国最初の官許の解剖（観臓）は小浜藩医（原松庵、伊藤友信、小杉玄適）の願い出に対し、京都所司代、第7代小浜藩主、酒井忠用が許可したものであり、1759年 東洋は『蔵志』を出版し、五臓六腑説を否定した。
- ・小杉玄適から観臓の知らせを受けた玄白は「いつかは自分も見ても確かめたいと思った」と『蘭学事始』に述べています。

『解体新書』の翻訳と刊行

- ・1766年中津藩医 前野良沢の誘いで、玄白、淳庵が江戸の長崎屋に 通詞 西善三郎を訪ねた時のことは『蘭学事始』に残されています。抽象的な言葉や動きを表す言葉（好き、嗜む）など外国語学習の難しさを聞き、玄白は習得を断念した。良沢は語学に打ち込む事を決心し、青木昆陽に師事した。1769年、良沢は中

津へ赴いた折に約100日長崎に遊学し、辞書や『ターヘル・アナトミア』を入手した。

- ・淳庵は、1771年『ターヘル・アナトミア』を通訳より入手し、玄白を通じて藩での購入を受けた。
- ・1771年3月4日、玄白、淳庵、良沢らは念願の腑分けに立会い、持参した解剖書の正確さに衝撃を受け、早速、翌日よりこの本の翻訳に取り組む。

『蘭学事始』の記述：「先ず、かの『ターヘル・アナトミア』の書にうち向いしに、誠に櫓舵なき船の大海に乗り出だせしが如く、茫洋として寄るべきかたなく、ただあきれにあきれ居たるまでなり」

凡例に翻訳にいたった動機を記載：「考えてみれば、解剖は外科医学にとって最も肝要な基礎であって、無知で済ますわけにはゆかぬ事柄である。さまざまの病症の所在も、解剖によらなければ知る事が出来ない。オランダ人の研究がこの方面で精密を極めるようになったのも、まさに解剖に基づいている。だから、医学の道に進もうとする者は、誰でも先ずこの解剖学から出発するのでなければ、決してものにはならないはずだ」

・困難と対策

- 1) オランダ語の解説は専門職の通詞にしかできなかつた
 翻訳チームの人選の妙：前野良沢を盟主とし、メンバーが平等な関係
 運営の巧妙さ：日中に議論し、玄白がその夜に漢文草稿を作った
- 2) 未知の領域では内容の理解・表現が困難であった
 原書の「一覧表」部分のみを訳し、「注」部分は割愛した
 人体構造を手がかりに内容を理解し、新

たな訳語を作った。日本語になかった医学用語（神経、動脈、軟骨、頭蓋骨、十二指腸や門脈など）を新たに作る「其中にもシン^ネ子^ネン（精神）などいへる事出しに至りては、一向に思慮の及ひかたき事も多かりし。これらは亦、往々は可^{かい}解^す時^{べき}も出来ぬへし。先符号を付置へしと丸の内に十文字を引きて記し置たり。」玄白による注釈「翼按ずるに」を加えた

- 3) 蘭書の出版に対する批判・偏見が予想できた『解体約図』（1773）により内容紹介をして世間の反応を打診
大通詞の吉雄幸左衛門に序文を依頼：良沢と玄白の貢献を讃える
大奥を介して将軍、京都の公家に献上

- 4) 原書の解剖図と同じ銅版画の技術がなかった『解体約図』では若狭の画家、熊谷儀克が木版画で作成
『解体新書』では平賀源内の弟子、小田野直武が木版画で作成

・『解体新書』によって何が変わったか

- 1) 人体の構造・機能について解剖学の正確な知識が得られた
解剖図巻の人体構造の表現が精緻になった
宇田川玄真『医範提綱』（1805）、緒方洪庵訳『人身窮理学小解』（1832訳）
- 2) 西洋伝統医学が日本に伝えられ、近代医学導入の準備が整う
漢方医学と蘭方医学が共存するようになった
近代医学の導入はポンペの医学伝習（1857～62）と大学東校（1871）以後
- 3) オランダ語の語学力が向上、蘭学の発展
オランダ語著作の解説・翻訳をできる人たちが増えた

オランダ語の科学・技術・文化が日本に伝えられた

- 4) 西洋の言語から日本語への翻訳による文化の導入が始まった
欧語による概念の日本語化
明治以後の文明開化への道を開く
- ・短期間に翻訳・刊行できた成功の要因
解剖学（人体の普遍性、解剖図の視認性）の魅力がモチベーションとなった
前野良沢の語学力
杉田玄白の企画力・実行力
チームによる学術的な研究・著作の成功は稀有なこと

玄白の著作

玄白は42歳の時の『解体新書』を始め40歳以後に九冊の著作を発刊している。そのうち『解体新書』と、その翻訳の苦労を思い起こして83歳の時に書いた回顧録、後に『蘭学事始』と名付けられた書は大変有名。

その他にも、『形影夜話』（70歳）や、健康を守るための心得『養生七不可』（69歳）などがよく知られています。

NPO 法人杉田玄白・小浜プロジェクトでは昨年入門書として、『養生七不可指南書』を編集、出版した。（晃洋書房、2024）

梅毒対策

『形影夜話』にて医学についての考えかたや医者的心構えを述べる。

「医は生涯の業にして、迎も上手名人には至らざるものと見ゆ。」

「梅毒ほど世に多く、然も難治にして人の苦悩するものはなし。是をよく療する人は世の中に少なきと心付、是を治せんことを目当とし、せめてこの一病を能療せんこと心に念じ、少壯の時は、此病に巧者なりと言う人を聞けば、必尋求め、其人に従い方術も学び習い、毎時是を其患者に施すに、我意に適するやう

に功を得たることなし。」

毎年1,000人の患者のうち7~800人は梅毒であった。(ペニシリンの普及以後、劇的に減少したが、2010年以降、増加傾向にある。)

・その後、蘭学塾「天真楼」で多くの門下生を育てた。北は一の関や秋田藩から南は豊後中津藩、長崎まで、多くの門人を育て、わずか100年ほどの間に近代医学の基礎知識、明治への土台を培った。

・門下生には大槻玄沢(芝蘭堂)、宇田川玄随、宇田川玄眞(玄白の娘 八曾と結婚、養子となったが、離婚され、後に宇田川家の養子となる)、杉田伯元(建部清庵の四男、娘 扇と結婚して杉田家を継いだ)などがある。

自著『玉味噌』によると、門下生は畿内及び七道三十八ヶ国に及び、104人を数えた。

中川淳庵と本草学

淳庵は『解体新書』の出版後、商館の医官ツェンペリー(Carl Peter Thunberg スウェーデン人でリンネに学んだ植物学者)や商館長ティチング(Isaac Titsingh、外科医)の滞在する江戸の長崎屋に出向いて交流を重ねることで、長崎に遊学していないにも拘わらず、その語学力は当代一流のものとなっていった。1776年にツェンペリーから医学のほか、植物標本作成法についても教えを受けた。ツェンペリーは在日16ヶ月で帰国、後にウプサラ大学の学長に就任、1784年に『日本植物誌』を出版した。その序文に、淳庵と桂川甫周の協力があったことを記す(日本の植物学の父)。ツェンペリー宛の二人の書簡がウプサラ大学に残されている。さらに1791年(淳庵没後5年)に出版した『日本紀行』(『江戸参府随行記』とも訳されている)の中では、淳庵と甫周の二人のことを「学問を熱愛する上に世の人のためになろうとする熱望があり、(中略)他の人には欠けている重要な知識を持っている」と称賛している。

未完の訳書には「和蘭局方」「和蘭薬譜」、「五液精要」の3つがある。

淳庵は1785年藩主に随行して、玄白とともに初めて小浜を訪れたが、発病のため翌年、江戸に帰り、膈症(胃がん または 食道がん)のため1786年6月7日死去(48歳)。

公立小浜病院では、2014年に中川淳庵を顕彰する薬草園を開設している。

2) 小石元俊による漢蘭折衷医学の推進

蘭学といえば、すぐに江戸における『解体新書』の翻訳が想起される。しかし、わが国で最初に人体を解剖“観臓”したのは京都の山脇東洋であり、その親試実験の学風の上に江戸で発達した蘭学をうけつぎ、これを関西に広めたのは、小石元俊(1743~1808)であった。元俊は解剖の技量において匹敵するものなしといわれた。

一小石家家系 直系男子一

初代 小石李伯(林野市之進直頼) ~1764年没
 二代 小石元俊 1743~1808年
 杉田玄白(1733~1817年)と交流
 三代 小石元瑞 1784~1842年
 頼山陽(1781~1832年)と交友
 四代 小石中蔵 1817~1894年
 緒方洪庵(1810~1863年)と交友
 現在の当主は九代目小石元紹氏 1959~(昭和60(1985)年3月京都大学医学部医学科卒)

小石家は初代、若狭小浜藩酒井家の元家老はやの林野市之進が故あって京へ上り、名を小石李伯と改め、医を生業としたところから始まる。それぞれが交流のあった主な人物と生没年を一覧表の右に示す。小石元俊は杉田玄白より10歳年下、元瑞は頼山陽より3歳年下、中蔵は緒方洪庵より7歳年下である。

元俊は十歳の時、古方派漢方医、山脇東洋の

門人で筑後柳川藩医の淡輪^{たんのわ}元潜に入門、その後、永富独嘯庵^{どくしょうあん}（同じく東洋の門人で長崎にて吉雄耕牛に師事、のち赤間関、大坂で開業）に入門した。独嘯庵は古医方と蘭方を学び、長崎漫遊でオランダ医学の優れていることを認識、漢方と蘭方を結びつける草分けとなった人物で、求めに応じて元俊に名を道、字を有素、号を大愚と授けた。

元俊は明和二（1765）年頃から数年間、西国を漫遊し、長崎にも行き、技術を磨き、名声を博して、弟子も多くなり、性磊落、才気に優れ、弁舌が鋭く、師 独嘯庵の影響で、蘭学へ開眼、人体解剖の敢行などの果敢さを持つ医師となった。数多くの腑分けに立ち会い、「陰陽五行説」「五臓六腑」など漢方の考え方に強い違和感を抱いていた。山脇門下で山脇東海（東洋の孫）の解体の殆ど全てに加わり、少なくとも十数体の解剖に参加しており、さらに『解体新書』刊行のインパクトを受けて、自らも数多くの解剖を行った。

天明三（1783）年には、伏見で解剖を行い『平次郎臓図』を作り、序文に、解屍の医学に必要な理由、関係者、作業の概要を記す。翌四年、元俊は長文の『平次郎臓図補遺並小引^{しょういん}』を書いた。解剖は残酷なようであるが、医学において大きな端緒を開くものであり、後に解剖する人のためにも、より詳細に記録しておくのが良いとの考えで、『解体新書』の記述と対比しながら記述している。写実主義の円山派から元俊が選んだ画家吉村蘭州が絵を描いた。ここには病理学的所見が書き込まれている。解剖に当たっては、しばしば炎天下の1日作業となることから、遺体の腐敗を恐れ、1日で解剖の全作業が終わるように周到な準備をしている。翌日には平次郎の霊を祀り、翌年には黒谷金戒光明寺に納骨した。刑死解体後の祭典は、山脇東洋以来行われてきたもので、その伝統が今日の大学における解剖祭である。

元俊がこの解剖にいかにか心血を注いだか、そして細かい点まで後の人の参考のため記したことは、燃ゆるが如き学究的精神と当時勃興しつつあった実証的精神を反映するものである。また、その中に、封建的思惟への批判をもこめて

いる。15年後、寛政十（1798）年、施薬院使^{やくいん}（長官）の三雲環善と山脇東海により施薬院（貧しい病人に薬を施し療養させた施設）で行われた解屍では、元俊の監修のもと、『施薬院解男体臓図』がまとめられた。元俊を解体者として、解体の許可を申請しており、京における解体の第1人者として、官医を凌ぐ元俊の実力が認められていたことを示している。1日で処理する必要があるため限界があるものの、平次郎の場合に比べ、緻密な描写で観察が深く、後にわが国における解剖学の進歩の証として、高く評価されている。

元俊の肖像画は、平次郎臓図を描いた吉村蘭州の息子の吉村孝敬によるもの。

杉田玄白との出会い：

『解体新書』を読んで感銘を受けた元俊は、玄白に手紙を出して、質問を送り、納得のいかないところを討論したいと希望していた。天明五（1785）年の夏、参勤交代で小浜に帰る藩主のお供をして帰国した玄白は、江戸への帰路、京都に立寄り、小石元俊と面談した。この時の滞在は短時日であったので、討論は時間切れで、十分に意を尽せなかったが、これを契機に、二人の交流が始まり、蘭学の普及に大きな役割を果たすことになった。

翌天明六年の秋に元俊は門人の一人とともに、江戸に玄白を訪ね、玄白は小石師弟を、大槻玄沢の新居に泊ませ、養嗣子伯元も共に起居させて、江戸と京都の医家が真剣に漢蘭医学を論じた。元俊は翌七（1787）年三月 玄白の養嗣子伯元を伴って帰洛した。

京都で伯元は元俊宅に泊まり実技を学び、元

俊の紹介にて、柴野栗山の塾にて漢学の素養をも学んだ。玄白は伯元に、家学の蘭方医学を伝授するとともに、さらに加えて高名な京都の古方家元俊につけて漢説を聞かせ、実技を習得させようと骨折ったのである。天明八年一月に栗山が東下し、伯元は江戸へ帰った。

実地診療に実績を積んできた漢方医 元俊が解剖を通じて蘭学の優れた点を認め、**漢蘭折衷医学**を実践したことで、一挙に関西での蘭学の第一人者となった。

小石家に残る「来簡集」にある手紙は930通現存している。うち杉田玄白からの手紙は10通存在する。1787年から1806年まで、20年間のやりとりの一部を紹介した。

・『蘭東事始』 文化12(1815)年 玄白83歳(亡くなる3年前)『解体新書』刊行の41年後の著書。当時は蘭学者の間で筆写されて伝わった。現存数は多くない。明治に入り福沢諭吉によって『蘭学事始』として出版された。

愛弟子の大槻玄沢に「手録」を、「あとさきなることをよきに訂正しわが孫子らに見せよかし」といって贈ったもの。蘭学の草創から隆盛に至るまでを書き綴っている。

「漢学は遣唐使など遣わされたり僧侶を留学させたりして直接あちらの国の人について学ばせて、帰国後は貴賤上下の人びとの教導のためになさったことなので次第に盛んになったのはもっとものことであった。蘭学はそのようなことではなかったのが、このように盛んになったのはどうしてか。便乗して売名行為などもあることは嘆かわしい。」

・小石元俊に関する記載には1章割かれている。

「彼は『解体新書』を読んで、古くからの学説と違っているところに疑いを抱き、みずからたびたび解剖して、この『解体新書』の真実であることに感心してそれ以来、深くこの本を喜んで読み、わたしに手紙をよこして、さらにな

お理解しがたいところを質問してきた。」「京都に帰ってからは、その塾において、出入りする生徒たちに、いつも『解体新書』を講義して、その実証的主旨を人々に教えたということである。これが関西の人々を蘭学に勧誘し、啓発した一つの要因である。」

元俊は解剖に基づく正確な人体構造の理解の上に、医学理論の体系化を試み、その知識を臨床診療に活かして、(官医にならず)市井の一医師、治療の実技を重視した臨床家として、明和六(1769)年大坂で開業した。安永六(1777)年京都に移住し、天明八(1788)年、京都の大火で再び大坂籠屋町に移り開業(衛生堂)。寛政八(1796)年後を齊藤方策に託して京都に移住し、隠居した。著述に専念したかったが、治療を求める患者が日々に多く、やむなく限定した診療を再開している(医学塾究理堂を開く)。

関西蘭学の主唱者という名誉を担った元俊ではあるものの、漢方医学の修行を通じて、実地診療の経験を積んできた元俊は、「漢蘭折衷医学」を実践するに至っても、終生、漢方と灸を重用した。元俊の素養が、初めからオランダ医学に入った人とは異なっていた事による。究理堂は、治療の実技を教える医学塾としての性格が強く、大坂の適塾の緒方洪庵より、急ぎ臨床修業を必要とする弟子の指導を依頼する手紙が究理堂に残っている。

小石元瑞(1784~1849) 三代目

元俊の後を継いだ元瑞は、京都の名医として知られ、多くの詩人墨客、名医と交わり、風雅の道にも通じた。『処治録』と題する元瑞のカルテは二十年分(文政12年4月から嘉永元年の6月まで)が現存し、延べ患者数は1万人を超える。儒者、詩人では頼山陽の診療回数が最も多く、その他に大塩平八郎も診察を受けている。

元瑞は医学塾究理堂を整備、発展させ生涯の入門者は千人に及んだ。肖像画は小田海僊画。

近年、村松洋は全国に残されている173組の『解体新書』の蔵本に見られる「書き入れ」文の調査を詳細に行い、31組に究理堂の小石元俊に関係する「書入れ」が見られ、大槻玄沢の芝蘭堂に関係する「書入れ」が6組に見られたと報告している。『解体新書』が広く究理堂の門人に教科書として用いられ、「書入れ」まで書写されて郷里へ持ち帰られ、解剖学の教育に大きなインパクトを与えた事を裏付けるものと考えられる。(日本医史学雑誌 70(1): 26, 2024)

第四代の小石中蔵は元瑞の子(次男)(1817～1894)

種痘所有信堂の創設メンバーとして、種痘の普及に功績有り。京都のお香、書画用品の老舗鳩居堂の支援あり、明治期まで存続した。著書に「種痘新全」あり

小石家関係の参考文献：

「究理堂所蔵京都小石家来簡集」小石家文書研究会 平成29年思文閣出版(小石家に来た手紙88通を解説。執筆期間は10年)

「小石元俊」山本四郎著 昭和42年吉川弘文館、
「究理堂の資料と解説」宮下三郎、多治比郁夫著
小石秀夫監修 昭和53年「京都の医学史(別刷)」
発行究理堂文庫、制作思文閣出版 非売品
小石家所蔵の主に書簡・書籍についてまとめたもの。執筆期間は約7年。

「医学究理堂について～関以西蘭学嚆矢として～」小石元紹著：百万遍通信 No.196: p.1-8, 2025.

その後の京都の蘭学界は、芝蘭堂で大槻玄沢に学び『ハルマ和解』を著した海上随鴟(稲村三伯)と、直接長崎にて修行した新宮涼庭の二派を加えた三派に分かれて進められた。

3) 笠原白翁による種痘の導入

笠原良策(1809～1880)は福井城下の町医、

笠原龍齋の子として越前国足羽郡深見村に生まれ、諱は良、字は子馬、号は天香楼、万延元(1860)年頃から、良策を改名して「白翁」と名乗った(vaccine, ワクシーネから)。

15、6歳から福井藩の医学所済生館に通い、妻木陸叟から本草学を学んだ後、文政12(1829)年から3年にかけて江戸に出て古医方派の漢方医 磯野公道に学び、福井城下木田中町で開業した。悲惨な痘瘡の流行を目にして、1836年頃、小石元瑞の弟子、大武了玄(加賀の蘭方医)に入門、次いでシーボルトに学んだ日野鼎哉(1797～1850)に入門して蘭方医となった。

弘化2(1845)年 牛痘接種の有用性を知り、藩主松平春嶽に牛痘苗の輸入を上申、老中阿部正弘への内願を実現したが、入手に至らず。嘉永2(1849)年に、バタヴィア(インドネシア)から輸入された牛痘苗(モーニッケ株)で、佐賀藩主お側医の植林宗建が、初めて種痘に成功し、その痘苗が長崎奉行所の唐通詞、頼川四郎八から日野鼎哉宛に送られた。鼎哉は早速、種痘を実施して生着を確認する(日野の仮徐痘館が開館)と、これを緒方洪庵(大阪道修町種痘所の開設)と弟子の笠原に分苗した。笠原は豪雪の中、命がけで栃ノ木峠を越え、子供から子供へと植え継いで、痘苗を福井城下へもたらし、接種に成功した(仮徐痘館開設)。

この成功に至るまでの苦難の物語が吉村昭の『雪の花』(新潮文庫)に描かれ、今春公開された映画 小泉堯史監督「雪の花～ともに在りて～」にて紹介された。(Amazon prime videoにて放映中)

笠原は福井藩内のみならず、北陸の近隣諸藩に種痘を広め、金沢、富山へも広まっていった。しかし、種痘に対する人々の抵抗は予想以上に大きく、藩医からの反発や中傷も激しく、福井藩内および大野藩で痘苗の断絶が起こった。2年後の嘉永4年(1851)、ようやく藩営の除痘館(100畳余)が開設され、詳細な運営マニュアルも作成された。

最近の新型コロナウイルス感染症に対してカリコ博士とワイスマン博士により開発された新しいRNA ワクチンについての論争（最初のmRNA ワクチンに対する不安に起因）にも共通するものがある。

まとめ：『解体新書』の出版によりもたらされた蘭学の導入とその後、約100年間の発展の歴史を振り返ってみると、古典的な漢方医療からの革命期に活躍した北陸の先人の多くが、官医、町医を問わず、市井で開業していた第一線の臨床家であったことが印象深い。

なお、福井県小浜市における杉田玄白・中川淳庵の顕彰事業については、拙著下記2編およびURLをご参照ください。

小西淳二：地域医療の再生に向けて—杉田玄白記念公立小浜病院の歩み— 全自病協雑誌 50:103-107、2011

小西淳二：若狭の医人—杉田玄白と中川淳庵— 福井県医師会だより No.638, p.5-17, 2014
杉田玄白記念公立小浜病院

[URL] obamahp-wakasa.jp

中川淳庵顕彰薬草園

[URL] yakusouen/obamahp-wakasa.jp

認定NPO 法人杉田玄白・小浜プロジェクト

[URL] sugita-genpaku.com

謝辞：小石家資料の閲覧許可をいただいた九代目当主、医療法人究理堂小石医院 小石元紹理事長 並びに笠原白翁についての資料を教示いただいた福井大学医学部地域医療推進講座山村修教授に深甚の謝意を表します。(2025/10/11)

